

# 教育委員会協議会 会議録

平成29年度第7回教育委員会協議会

場所：高知共済会館 3階 「桜」

## (1) 開会及び閉会に関する事項

開会 平成30年2月13日(火) 18:00

閉会 平成30年2月13日(火) 19:45

## (2) 教育委員会出席者及び欠席者の氏名

出席委員	教育長	田村 壮児
	教育委員	平田 健一
	教育委員	竹島 晶代
	教育委員	八田 章光
	教育委員	木村 祐二
	教育委員	中橋 紅美

## (3) 高知県教育委員会会議規則第8条、第9条の規定によって出席した者の氏名

高知県教育委員会事務局	教育次長	北村 強
〃	教育次長	藤中 雄輔
〃	教育次長	永野 隆史
〃	高等学校課課長	高岸 憲二
〃	高等学校課課長補佐	藤田 優子
〃	高等学校課再編振興担当チーフ	池上 淑子 (会議録作成)
〃	高等学校課指導主事	野中 昭良
〃	教育政策課課長	酒井 啓至
〃	教育政策課課長補佐	泉 千恵
〃	教育政策課チーフ	津野 哲生
〃	教育政策課指導主事	小島 丈晴 (会議録作成)

## 【開会】

田村教育長	<p>ただいまから、県立高等学校再編振興計画の「後期実施計画」に関する第7回高知県教育委員会協議会を開会させていただきます。委員の皆様におかれましては、大変お忙しいなか、また寒いなかをご出席いただきまして、誠にありがとうございます。</p> <p>この会は、ご案内のとおり、県立高等学校再編振興計画「後期実施計画」について協議をする会でございますけれども、今回で7回目ということでございます。これまで、第2回から6回にかけて県内5ブロックで、地元の市町村長さん、あるいは教育長さんに、大変熱心にご意見をいただきました。また、会場に来ていただいた学校関係者からも、強い想いのご意見を聴かせていただいたところでございます。</p> <p>今回からは、この後、スケジュールについての説明をさせていただきますけれども、地域のご意見を踏まえまして、この計画の検討を進めさせていただきたいと思っております。</p>
-------	---

八田委員	<p>4月中には「中間とりまとめ（たたき台）」を決定し、さらに検討を重ねて、年内には「後期実施計画」を策定したいというふうに考えておりますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。今回は、次回と合わせまして、計画策定についての全体的な方向性について、協議をしていただきたいと思ひしておりますので、どうぞよろしくお願ひします。</p> <p>それでは、進めさせていただきます。まず、本日の議事録への署名人は八田委員、よろしくお願ひいたします。</p> <p>はい。</p>
------	--

**【議題】**

**○「中間とりまとめ（たたき台）」までのスケジュールについて**

田村教育長	<p>それでは、まず、中間とりまとめまでのスケジュールについて、高等学校課から説明をしてもらいます。</p>
<p>高等学校課 高岸課長</p>	<p>はい。高等学校課課長の高岸でございます。資料1をお願いいたします。これまで、地域会を5地域で開催して、市町村の首長さんや教育長さんから意見をお伺いしてまいりました。本日の第7回で、まず、第2回から第6回までの地域会で出された意見の確認をしたいと思ひしております。この第7回と第8回の会議につきましては、全体の方向性を協議していきたくて思ひます。全体の方向性の論点につきましては、また後で説明をさせていただきます。</p> <p>今後ですけれども、3月16日に第9回目、3月28日に第10回目、これにつきましては、地域別に、学校の在り方について協議をしていきたくて思ひます。併せて、2月の県議会では主に地域会で出された意見について、ご報告をしていきたくて思ひます。4月中旬に開催予定の第11回目になりますけれども、「中間とりまとめ（案）」について、協議を行いたく思ひます。</p> <p>その後、定例の教育委員会にかけまして、4月下旬には「中間とりまとめ（たたき台）」を決定し、公表していきたくて思ひます。この後のスケジュールにつきましては、これまでの地域会で説明してきたとおりでございます。以上、資料1の簡単な説明でございます。よろしくお願ひいたします。</p>
田村教育長	<p>第11回までの検討のスケジュールについて、説明をさせていただきました。この件について、特にございませんでしょうか。よろしいですか。</p> <p>それでは、今後このようなスケジュールで進めたいと思ひますので、よろしくお願ひいたします。</p>

**○第2回～第6回教育委員会協議会で出された意見について**

田村教育長	<p>続きまして、第2回から第6回までの地域別に開催した教育委員会協議会で出された意見について、高等学校課から報告をもらいます。</p>
-------	--

高等学校課  
高岸課長

続きまして、資料2になります。県内5地域で開催いたしました地域会  
で出された意見を確認していきたいと考えております。

まず、11月21日、安芸市民会館で行われました東部地域の概要について、  
ご説明をさせていただきます。資料の2ページの下をご覧ください。

室戸市教育長から、室戸高校につきまして、室戸高校の全日制・定時制  
を含めて、ぜひ存続していただきたい。室戸高校がなくなると、人口減少  
に拍車がかかるのではないかと。すごく心配、不安である。また、室戸高校  
の必要性は、東部の端にあり、子どもたちの選択肢が一つしかないという  
地理的側面が一番大きい。2つ目は、経済的な側面であり、厳しい環境に  
ある子どもたちも多く、バス代・下宿代も厳しい。3つ目は、室戸市の小  
中学校のキャリア教育の目標・テーマは、「ふるさとを愛する心を持った児  
童生徒の育成」であり、その先導役として、高校生の存在は絶対に必要で  
あるといったご意見。また、現時点では、総合学科か普通科かということ  
より、総合学科のメリットを改めてアピールする必要がある、といったご  
意見が出されております。

続きまして、3ページをお願いいたします。田野町教育長から、中芸高  
校について。中芸高校の存続をお願いをしたい。中芸地区のみならず、高  
知県の東部の各地域から中芸高校に進学して、高卒資格を取得したいとい  
う方も多く、やはり、なくてはならない学校だと思っている。夜間部も、  
人数的には増えてくる傾向にある。聴講生が多いということを見ても、学  
びたい時に学べる環境は、非常に大事である。中芸高校は統廃合ではなく、  
今の形で存続していただきたい。20人という枠はクリアすべく、地教委も  
努力が必要である。基礎学力の定着は当然、地教委の業務であり、こうい  
った生徒に育てたのでお願いしますという形で、中芸高校に渡す取組が必  
要であると考えている、といったご意見がございました。

3ページ下から4ページにかけて、安芸市教育長からは、安芸高校、  
安芸桜ヶ丘高校、中芸高校についてご意見がございました。まず、中芸高  
校の昼間部・夜間部について、安芸市から、多様で様々な事情のある生徒  
を受け入れていただいているということ。また、県立中学校には県立中の  
目的があるので、県立中は県立中で頑張ってもらいたい。平成29年度の県  
立中の入学者数を聞くと、安芸市から過半数行っている。大変多いという  
状況がある。また、安芸高校と安芸桜ヶ丘高校の統合について、個人的に  
市民から聞く声としては、「活性化のためには、安芸桜ヶ丘高校が元に戻る  
のはやむなし」とか、あるいは「2校のままで頑張ってもらいたい」とい  
った意見を聞く。なお、地域としては、普通科、そして工業科、商業科を  
残してもらいたいと思っている、というご意見がございました。

続きまして、11月30日に南国市保健福祉センターで行われました中部地  
域①の概要について、ご説明をさせていただきます。4ページの下段の方  
をご覧ください。

まず、香南市教育委員から、城山高校についてご意見がございました。  
城山高校は一時期、1学年1学級という状況に追い込まれたが、現在、地  
域の方々の支援や県教育委員会の理解をいただき、1学年2学級に復帰を  
したと。学校としては、学習面ばかりでなく、福祉教育にも重点を置き、  
周りの方々との連携も深めてきている。また、先生方の努力により次第に  
成果も上がっているが、残念ながら、生徒数が急激には増えていない。現

在、子どもたちの部活動等人数により制限をされているところがある。子どもたちが自分たちの想いを持って、十分に活動できるようにさせてやりたいといったご意見がございました。

5 ページをお願いいたします。続きまして、香美市長から、山田高校についてご意見がございました。まず、市内の児童生徒は、中学校、高等学校への進学の際、香美市を離れる傾向が強く、山田高校が様々な取組を充実させているにもかかわらず、地域からの進学が低いという現状がある。平成 31 年度からの県立高等学校再編振興計画「後期実施計画」に対して、高等学校教育振興の観点で、山田高校を探究型、高知工科大学との連携型の高校にすることを提案する。特色のある教育を進める東部地域の拠点校として、新しい教育を発信し、県の高校全体のレベルアップにつながる。山田高校が光ることで中学生への強い刺激となり、学力向上が期待できるといったご意見をいただいております。

続きまして、5 ページ下から 6 ページにかけまして、南国市教育長から、高知農業高校、高知東工業高校、岡豊高校についてご意見がございました。南国市は 3 つの高校があり、それぞれ、農業科、工業科、普通科があり、南国市の子どもたちは恵まれているというふうに考えていると。まず、高知東工業高校は、全日制が 4 学科で、南国市内の工業生産関連会社へ多くの子どもたちが就職している。定時制の卒業式に出席しているけれども、働きながら、苦しい 3 年間（なかには 4 年間）を本当にやり抜いてきた生徒さんの、あの想いを受け止めて、保護者も私も涙を流しているというようなご意見。厳しい状況のなかで、働きながら学ぶ定時制の存在について、お力添えをいただきたいというご意見をいただいております。

次に、岡豊高校につきましては、普通科に体育コース・芸術コースがあり、3 年間、専門的なコースで学ぶことができる。普通科ではあるが、子どもたちの希望に沿った総合的なコースを保障できるようになっているというご意見。また、高知農業高校については、農業後継者育成で、絶対なくしてはならないという想いである。縮小したり、科を少なくしたりすることのないように、現在のままで設置しておいてほしいといったご意見がございました。

次に、12 月 4 日に高知共済会館で行われました中部地域の 2 回目、北部地域の概要について、ご説明をさせていただきます。

6 ページの下半分から 7 ページにかけまして、本山町教育長から、嶺北高校についてご意見をいただいております。まず、嶺北高校がより魅力的な学校となるように、本山町、土佐町、嶺北地域が一丸となって、地域とともにある学校づくりに取り組む。高校は次第に活力を失ってきた。地域が高校を失った場合、生徒だけではなく、その保護者や家族が地域外に流出して、地域の存続が危機的な状況になる。また、嶺北高校でも、カヌーを切り口として、県外生徒の受け入れを開始し、「嶺北高校魅力化プロジェクト」を推進していきたい。隠岐島前高校の島親制度に習い、県外生徒を受け入れてくれる地元住民の開拓を開始したところである、といったご意見がありました。7 ページになりますけれども、土佐町の教育長から、同じく嶺北高校につきまして、ご意見をいただいております。

大きな課題は、子どもたちが嶺北高校で球技系のスポーツができてないために、外へ流れている。嶺北高校自体の団体戦が、なかなか難しい状況

にもなっていると。一つの部活に集中するのではなくて、多彩なスポーツができるような部活動を考えている。また、部活動については、カヌーとアウトドアを考えたけれども、嶺北地域の基盤産業である第一次産業を生かした、地域づくりのための高等学校を目標としていきたい。学力も上げながら、うまくやらないといけないが、そこがなかなか難しいといったご意見をいただいております。

続きまして、8ページになります。8ページは、いの町長から、主に追手前高校吾北分校についてのご意見をいただいております。吾北分校の存在意義として、1点目は、地域に根ざした学校、吾北地域の活性化に欠かせない、大きな宝である。2点目は、将来に向けたまちづくりである、移住定住の促進である。3点目は、少人数の良さを生かした、一人一人を大切にした学校である。4点目は、大地震が予想される今日、内陸部にある吾北分校の存在意義は、非常に大きいということがあると。そして、吾北中学校の生徒が吾北分校を志願する主な理由としては、一つとして、吾北分校は、地域貢献のための学校行事を体験させていること。2つ目として、少人数指導できめ細かな指導をしてくれ、社会的自立のための進路保障がされていること。3つ目、地域に貢献できる人材が育成されていること、というご意見をいただいております。また、いの町の支援策として、財政的な支援では、吾北分校の生徒に対して、新入生支援金を新1年生に10万円を限度に補助し、通学費補助金として、高知県内の公共交通機関の定期券額を、平成27年度より、2分の1から3分の2に増額補助するなどしているというご意見をいただいております。

続きまして、9ページをお願いをいたします。土佐市長から、高岡高校、また高知海洋高校についてご意見をいただいております。まず、高岡高校の存続を望む声は、強いものがあると。私も同じ意見をもっているが、市民の間には希薄な部分があると。高岡高校の定時制は頑張っているという印象があり、すばらしい教育をされていると思っている。定時制の教育は、サポートもしっかりとされており、生徒も増えている。必要性を感じるところは、実は中学校で今、不登校がすごく増えているという状況がある、というご意見がございました。また、高知海洋高校は、商工会の青年部がウルメを売り出すことに呼応する形で、食品関係の分野で高知海洋高校が関わっている。高知海洋高校は実績も含め、地域との関わりを持ってくれているといったご意見がありました。

次に、1月15日に四万十町農村環境改善センターで行われた高吾地域の概要についてご説明をさせていただきます。

9ページ後半から10ページにかけまして、まず佐川町教育長から、佐川高校についてご意見をいただいております。佐川高校が行きたい学校になるために中学生が求めていることは、大学への進学や就職の保障、独自性のある取組、学校の魅力の発信である。特に、国公立大学への進学者を増やしてもらいたいというご意見をいただいております。また、佐川高校定時制は、不登校の子どもの受け皿として重要な学校である。近年3名から5名進学している。引き続き、佐川高校定時制は大事な位置付けであるといったご意見をいただいております。

10ページから11ページにかけまして、四万十町の副町長さん、それから四万十町の教育長さんから、窪川高校、四万十高校についてご意見をいた

だいております。まず、地域の教育力は、移住定住にも大きな影響力を持ち、保幼小中高が連携して、誰もが学べる魅力ある教育環境づくりを進めることで、優しい教育のまちとしてのブランド化を目指しているということ。入学者の減少が、現在続いているが、高校の教育活動は地域の活力そのものであり、存続は四万十町の課題であるというご意見をいただいております。また、地元からの進学者を 50%以上確保していきたい。特色ある取組を絡めながら、20 人を超える入学者を、町も支援をしていきたいといったご意見をいただいております。また、会場の傍聴者の方から、11 ページの 4 の所にありますけれども、平成 31 年度に開校する須崎総合高校の普通科を、進学拠点として指定していただきたいといった要望のほか、田舎の学校をなくすのではなく、高知市内の学校の統合で行ってほしい。あるいは、四万十町にある 2 つの高校は、地元にとってはなくてはならない学校である、などといったご意見もいただいております。

最後になりますけれども、1 月 24 日に四万十市立中央公民館で行われました、幡多地域の概要についてご説明をさせていただきます。

11 ページ下から 12 ページにかけて、まず黒潮町長様からご意見をいただいております。大方高校についてですが、大方高校には定時制・通信制もあり、リカレント教育の一環として、学ぼうとする者に過度の負担を強いることのないよう配慮し、継続していかなければならないと考えている。また、大方高校の取組は地域の高い評価を得ており、学校運営については、配慮を要する生徒への支援体制を含め、保護者の高い評価を得ているといったご意見をいただいております。

続きまして、四万十市教育長様から、12 ページから 13 ページにかけて、中村高校、そして西土佐分校、幡多農業高校ほか、幡多地域 7 校について、それぞれご意見をいただいております。まず、中村高校は、中央部の高知追手前高校、東部の安芸高校と並んで、西部の進学拠点校として大きな期待があるということ。そして、県立中村中学校については、この中学校の誕生により、親元から安心して進学できる地元の中高一貫校において、6 年間のなかで高い学力を身に付け、その希望を確実に実現することに期待があった。しかし、その期待に十分応えるだけの進学実績や、保護者、地域からの信頼度の高い評価は届いていない、というご意見をいただいております。

また、中村高校西土佐分校については、最近、「Rapport（ラポール）」というボランティアサークルによる自主的主体的な地域貢献や、カヌー部の全国レベルの活躍等により、分校の生徒の地域での存在感は価値あるものになり、何より今なお、親元から安心して通学できる高等学校としての存在感は、保護者、地域、私どもが認めるところである。厳しい環境にある子どもたちへの支援という基本方向からも、何らかの形をもって存続を継続してほしい。四万十市としては、貴重な西土佐分校の存続のために、学生寮、住居を提供したほか、毎年 130 万円の予算を講じて、生徒の部活動やサークル活動、学生寮の助成等の継続的な支援をしている、というようなご意見をいただいております。

また、幡多農業高校は、40 年ほど前に比べ格段に学校の存在価値を上げている。宿毛工業高校は、テクノロジーとイノベーションの進化と創造をもたらす意味でも、大変重要な存在感を示しているといった、それぞれの

	<p>ご意見をいただきました。</p> <p>続きまして、13 ページになりますけれども、宿毛市教育長様から、宿毛高校、宿毛工業高校についてご意見をいただいております。まず、宿毛高校の総合学科の意味合いやメリットが、十分市民に浸透していないというご意見をいただいております。宿毛高校、宿毛工業高校が、地域に果たしている役割は非常に大きい。適正な規模で培うべき教育が求められてくると思うので、地域の想いや、地域が寂れていくとか色々な想いを受け止めているが、最終的に子どもにとってより良い教育環境とは何かと考えた時に、切磋琢磨できるような環境、あるいは様々な意見を受け止め、そういったなかで、自分の意見を相手に伝え理解を求めていく努力ができる環境が必要であるという意見をいただいております。</p> <p>13 ページ下から 14 ページにかけまして、土佐清水市市長さんと土佐清水市教育長さんから、清水高校についてのご意見をいただいております。前期の再編振興計画のなかには、「高台への移転を検討する」という文言が入っているので、後期の計画では、可及的速やかに実現できるように協力願いたいということで、高台には住宅が増え、交通の便も充実してきている。清水高校については土地もあり、県教育委員会に具体的に提案をしている。高校についてはコンパクトな校舎で、清水中学校とより連携して、使えるものは一緒に共有しながら中高一貫をさらに強めていきたい。小さくてもすばらしい高校を目指したいというご意見をいただいております。</p> <p>さらに、清水高校の定時制につきましては、生徒が少ないが、中学生の時に不登校になったり、色々な事情で、精神的にも全日制に通うことができない子どもの受け皿として、定時制は土佐清水市にはなくてはならない存在であり、中学校ではいろんな環境になじめなかった生徒も、定時制で学んで、市議会議員になった方もいるので、定時制の役割は非常に大きい。また、ジョン万次郎の縁でアメリカとの交流もあるので、国際交流に特化したコースなど、特色ある学校づくりも大切であるといったご意見をいただいております。また、会場の傍聴者のなかから、小規模の高校の運営について、小規模の高校でも運営していけるという枠組みを、県教育委員会がつくってもらいたい。20 人という最低規模を見直してもらいたい、などといったご意見があったところでございます。</p> <p>以上、簡単ですけれども、それぞれの地域でお伺いした意見の概要でございます。よろしくお願いたします。</p>
田村教育長	<p>県内5会場では大変寒いなかを、皆さんご出席いただきまして、本当にご苦労さまでございました。</p> <p>今、その時のご意見をまとめたものを説明してもらいましたけれども、大体思い出していただいたのではないかと思います。この件については、5回出られて、その感想がもしあればお伺いしたいと思いますけれども、いかがでしょうか。</p>
八田委員	<p>一つ感想です。それぞれ地域ごとに、学校が非常に支援していただいているというか、愛されているというか、本当に地域を挙げて何とかしようという取組をされているのを、本当によく感じました。</p> <p>その話を聴いていると、なかなか再編振興でドラスティックなことをす</p>

	<p>るのは難しいという気もしながら、皆さんの熱い想いを聴いていました。</p> <p>そのなかで、やはり思ったことは、地域の方が非常に活性化に貢献というか、コミットしようとしていただいているということが分かったので、われわれもそれにどう応えていくかという振興の部分を、しっかり出さないといけないなということを感じました。以上です。</p>
田村教育長	<p>ありがとうございました。本当に、黒潮町長とか、熱く熱く語っていただきました。そのほか、いかがでしょうか。</p>
竹島委員	<p>これからの高知県を考えた場合、少子高齢化ということで、清水市長がおっしゃられた、コンパクトな校舎で小中高連携しながらということが、やはり理想ではないかと、私はすごく感じました。何年前に統合した中学校を見に行きましたが、その時にはすごく荒れていました。けれども、この前の説明を聞いたら、すごく頑張っていて、今はそんなことないですよとおっしゃっていました。</p> <p>やはり、こういうコンパクト化を目指していけば、子どもたちも、何かいろんな行事にしても、色々、お姉さんお兄さんたちと一緒にできるし、高校生は妹や弟のような感じで、そういう子どもたちを見れるし、すごくいい環境だなと思いました。</p>
田村教育長	<p>ありがとうございます。郡部の小規模校においては、中学校との連携というか、コンパクトにまとまってやっていくことが大事ではないかと思えます。</p>
平田委員	<p>私も感想でございますけれど、先ほど高等学校課長さんから、ポイントについてご説明がございまして、その場面をまた、振り返りながら聞かせていただきました。</p> <p>生徒減少というなかで、やはり地域性の強い、本校・分校、定時制ともに、いずれの市町村においても、その高校の存在を必要だと大変強く考えていると思いました。そのために高等学校へ、ハード面も含めましてソフト面でも、本当にこんなに県立学校へ支援をしてくださっているのかと思ったのが、私の感想でございました。以上でございます。</p>
田村教育長	<p>ありがとうございました。それぞれの市町村が、地元の県立高校に対して、いろんな形で、物的・財政的・人的な支援をしていただいているということを、われわれとしても確認をさせていただいたところでございます。</p> <p>木村委員は、よろしいでしょうか。</p>
木村委員	<p>それと全く同じ観点で言うと、地域的にも同じような厳しい状況のなかにある学校で、いの町や四万十町などの市町村によっては、定期代を補助しているとか、様々な物心の援助があるわけですけども。</p> <p>それが無いエリアもあるわけで、同じ高校で学ぶ子どもたちで、地域によって差があるというのはどういうことなんだろうなというのを、少し考えさせられました。</p>



田村教育長	市町村によって温度差もあると思います。ありがとうございました。 そのほか、どうでしょうか。とりあえず感想ということですので、こんなことでよろしいですか。中橋委員はよろしいですか。
中橋委員	私の感想としましては、やはり保護者の皆さんというのは、進学には限らないですけど、進路保障というものに関心があると感じました。各地域において、やはり進路が保障できるような学校づくりということが、保護者は関心があるなど。一方で市町村、自治体の方は、その学校の存在によっての地域の活性化ということに関心があり、立場が違って関心の面も違うのかなと感じたところです。
田村教育長	ありがとうございます。市町村、保護者、それぞれの立場の違いによって、少し高校への期待するところが違うという面もあるのではないかなというようにございます。 一通りお伺いしましたけれども、それ以外に特にございませんか。 それでは、5回、本当に寒い会場が多かったですけれども、皆さん欠かさずにご出席いただいて、大変ありがたく思っています。その際に色々ご意見をいただいたことについての感想をお話しいただきました。

#### ○「後期実施計画」策定に関する全体の方向性について

田村教育長	それでは、資料3に基づきまして、今度は計画策定に関することですが、けれども、「後期実施計画」策定に関する全体の方向性について、高等学校課から説明をしてもらいたいと思います。
高等学校課 高岸課長	16ページの資料3をお願いいたします。「後期実施計画」の策定に関する全体の方向性について、ご議論をいただけたらと思っております。 これまでの地域会で出された意見、また「前期実施計画」からの継続検討事項や、適正規模に関する検討事項などを踏まえ、現時点で、今後検討する必要があると思われる事項について、以下7点を事務局としてまとめております。 1、本校の最低規模について 2、分校の最低規模について 3、定時制（夜間部）の最低規模について 4、各校の振興策について 5、南海トラフ地震への対応について 6、併設型中高一貫教育校について 7、学科（総合学科や地域の実態やニーズを踏まえた新たな学科など）について、という7項目を考えております。これ以外の論点、あるいは関連して協議しておくべき事項等がありましたら、出していただけたらと思っております。資料3の説明は以上でございます。
田村教育長	全体的な方向性ですので、個別の学校の、個別具体の計画については、また改めて、次の次の回から検討させていただくとして、今回と次回につ

各委員	<p>いては、全体の方向性について議論させていただいたらどうかということです。その議論すべき項目として、この7点ぐらいがあるんじゃないかということでございますけれども、この点についてはよろしいでしょうか。</p> <p>(了承)</p>
田村教育長	<p>それでは、項目も7項目ということで多うございますので、今回は、1項目目の「本校の最低規模について」から4項目の「各校の振興策について」についてご議論をいただきたいと思えます。</p> <p>この後、それぞれの項目について高等学校課から説明してもらった後、委員の皆様それぞれに、基本的にお一人ずつ、ご意見を聴かせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。では、説明をしてください。</p>
高等学校課 高岸課長	<p>それでは、17ページから19ページにかけまして、まず、本校の最低規模について、ご議論をいただけたらと思えます。</p> <p>まず、17ページの(1)の所にありますけれども、平成26年10月に策定いたしました「県立高等学校再編振興計画」では、全日制の本校の最低規模は、1学年2学級以上が必要である。ただし、中山間地域にある学校や学び直しの機能をもった学校は特例として、1学年1学級20人以上としています。多部制単位制(昼間部)の最低規模は、1学年1学級20人以上としています。生徒数が減少するなかで、教育の質を維持、向上していくことができるよう、適正な学校規模の維持と適切な学校の配置に努めることとしています。</p> <p>魅力ある学校づくりに取り組み、地域とともに生徒数確保に努めてもなお、最低規模の基準を下回り、将来的にも最低規模の生徒数を確保できる見込みがない場合は、学校の統廃合を検討することとされています。</p> <p>従いまして、最低規模を下回ったから、直ちにその学校を募集停止にするという考え方はとっておりません。</p> <p>(2)に、平成29年度の入学生が最低規模を下回っている高校は、中芸高校、四万十高校となっています。中芸高校につきましては多部制単位制であり、また四万十高校は中山間地域にある学校ですので、いずれも最低規模は、1学年1学級20人以上という状況でございます。</p> <p>18ページには、先ほども説明をさせていただきましたが、これまでの教育委員会協議会で出された意見を再掲しておりますので、ご参考にしていただけたらと思っております。</p> <p>それから、19ページの(4)にまいりますけれども、方向性を検討する際の留意点ということでございます。本校の最低規模の考え方が出されました経緯といたしましては、県立高等学校再編振興検討委員会において、「高等学校教育の質を保障し、生徒の多様な学習ニーズに応え、生徒一人一人に応じた学習指導を行うためには、1学年2学級以上が望ましい」ということと、「本県の人口の偏りや地理的条件、通学のための交通の利便性を考慮すると、地域によっては配慮が必要であり、この場合は、1学年1学級20人以上が必要」ということが議論をされ、平成25年2月の「県立高等学校再編振興に関する報告書」がまとめられております。</p>

この報告書を踏まえて県教育委員会で協議し、パブリックコメントを実施し、平成 26 年度から平成 30 年度の基準として定めたのが、平成 26 年 10 月の「県立高等学校再編振興計画」となっております。

なお、再編振興計画策定後の現状といたしましては、中学校卒業生数の推移については、平成 29 年 3 月の 6,543 人から、平成 35 年 3 月、推計値ではございますけれども、5,543 人で、1,000 人減少する見込みとなっております。一方で、現在、県および各市町村において、移住促進や少子化対策等の施策を実施し、地方版総合戦略や人口ビジョンなど、人口減の緩和や人口増に向けた取組を行い、地域の活性化を図る計画等を推進しています。

本校について、存続した場合のメリットについて、その表にまとめておりますけれども、地域に学べる場（高校）がある。地域で子どもたちが育ち地元へ愛着を持つ。学校を拠点として、移住定住に向けた施策や地域活性化の施策を展開できる、といったことが考えられます。

一方、他校との統合の場合のメリットといたしましては、一定規模の生徒がいることで、学習面・部活動面等での活動が充実する。高校教育の質の保証が一定、担保されるといったことが考えられます。統合のうち、その場に学校を残す場合ということが考えられますけれども、その場合の具体例につきましては、欄外の所に、分校化、あるいはキャンパス制の導入等を考えられるということをご記載しております。

本校につきましては、存続した場合の課題は、科目選択や社会性の育成といった、高等学校としての教育の質の保証をどう担保していくのかが課題となり、また、団体競技を中心に部活動等が衰退するといったことも考えられます。さらに、1 学年 1 学級 20 人以上という最低規模を変更しない場合の課題といたしましては、最低規模を上回るための活性化策が必要となる。また、地元以外からの生徒数確保も必要となるといったことが考えられます。最低規模を変更する場合の課題といたしましては、新たな基準が必要となる。基準を下げることで、さらなる入学者減につながる可能性もあるといったことなどが考えられる。といったことで、メリット・デメリットということで、表にまとめておるところでございます。

一方、他校との統合を考えた場合の課題としましては、地域から学べる場（高校）がなくなるといったことが大きなことでありまして、また、住民の人口流出などの問題が発生するということが考えられます。

中芸高校、あるいは四万十高校等の問題はございますけれども、一般的に本校の最低規模についてどのように考えるかということ、全体的な方向性について、ご意見をいただけたらと思います。以上でございます。

田村教育長

それでは、この項目は、本校の最低規模についてということでございます。

「県立高等学校再編振興計画」のなかでは、原則、1 学年 2 学級以上としながら、過疎地域の学校や発達障害等の対応が必要な学校においては、1 学年 1 学級 20 人以上という、一応基準を設けて、その減少によって、生徒確保に努めても最低規模の基準を下回った場合には、学校統廃合を検討するということになっておりますけれども、18 ページにございますように、地域で色々ご意見を伺った際には、例えば一番下の所でございますように、1 学級 20 人以上の最低規模についても、再検討してもらいたいという

<p>平田委員</p>	<p>ようなご意見もあったところでございます。</p> <p>そういったことを踏まえまして、それと、さきほど説明をしてもらいました、存続する場合、それから、統合する場合のメリット・デメリット、こういったことを見ていただきながら、全体的な方向性ですね。個別の学校については、また改めてご検討させていただきますけれども、全体的にどういうふうに、この本校の規模を考えていったらいいのかということについて、ご意見をいただけたらと思います。</p> <p>そしたら順番に、まず平田委員から、逆時計回りをお願いします。</p> <p>本校の基準について考えていることをということで、私の考えていることとお話しさせていただきたいと思います。</p> <p>19 ページの上の方になるとは思いますけど、県立高等学校再編振興検討委員会で相当、この最低規模の基準については、議論を重ねた結果だというふうに思っております。教育の質ということで表記されておりますけど、教育課程で選択科目が置けるのかとか、部活動でどうなるのかとか、高校教育で切磋琢磨できる最低人数はとか、様々な議論のなかで、最低規模の基準はつくられたものだと思っております。</p> <p>併せまして、後期の実施計画につきましても、前期の継続性も含めて、本県として理想的な高校教育の基準を示していると、私は思っております。ただ、全国的にも、高知県においても今、すべての市町村で生徒が減少しているという観点から、後期の再編振興策については、こうした基準があるからと一定の線を引くのではなく、基準は基準として大事にしながら、地域の特性を踏まえて、子どもたちにとってどうかということを重視しながら、地理的・経済的な視点とか、地域としての高校の存在、地域としての産業振興など、総合的に判断をしていく必要があるのではないかと、私自身はこの基準を見ながら考えているという状況でございます。以上です。</p>
<p>田村教育長</p>	<p>ありがとうございました。では、順番をお願いします。</p>
<p>八田委員</p>	<p>私は、「県立高等学校再編振興に関する報告」でずっと議論をされてきた経緯を考えますと、高等学校での教育の質を保証するうえで、20 人というのは、いろんな意味で検討された結果だというふうに理解しています。今、本校の最低規模ということで議論はしていますけども、この時の再編振興に関する報告のなかでは、分校についてもやはり、1 学年 1 学級 20 名以上が望ましいというような数字があつて。あるいは定時制の昼間の場合も、1 学年 1 学級 20 人以上という数字があつて。これは、発達段階を考えた時に、広くいろんな友人と会いながら、切磋琢磨しながら勉強していくという環境が、高等学校では必要だという認識のもとにある数字だと思います。</p> <p>もちろんこれが、じゃあ 10 人では駄目なのかという、明確な根拠ではないんですけども、この 20 人という数字は、本県の基準として今後も必要なのではないか。ただ、じゃあ 20 人を切ったら、すぐにもうそれは駄目なのかというところが、やはり難しくて。地域の事情があつて、どうしても 20 人を切ることが出てきた時に、だから、その学校を統廃合するのではなく、どうやって 20 人を確保していくかということに、むしろ注力して</p>

<p>木村委員</p>	<p>いくと。力を注いでいくという方向性ではないかと考えています。</p> <p>私も、最低規模を、例えば 20 人から 10 人にするとか、そういうことはあまり意味がないことではないかなと思っています。おそらく、今考えられる高等教育としての子どもたちの本来の教育活動が、果たして、8 人とか 10 人でできるのかどうかということは、すごい疑問がありますが、学びの場所を子どもたちから奪うことはしたくない。従って、地域の学校をできるだけ残さないといけないんですけども、高等学校の教育としての質の保証を、ここにも書かれてますが、それをどう担保していくかという知恵を、もっと出さないといけないだろうなど。</p> <p>例えば、IT 教育をさらに進めたり、例えば、ほかの大規模高校との連携をもっともっと進めて、少人数の学校でも大きな人数の学校との何か連携、具体的にはどういうことができるのかは、さらに考えないといけないんでしょうけども、そんなことも考える。それと、スポーツやクラブ活動も、それは地域の行政や市町村の教育委員会、県の教育委員会もそうですが、何か工夫がそこに行えないかと思えます。多分、本来 20 人は担保したいんだけども、ある意味 10 人でもやっていける姿を探し出せるのではないかなと思えます。</p>
<p>中橋委員</p>	<p>私としましては、今、本校の最低規模についてのお話ではありますけど、ちょっと全体、今日の協議の 4 項目すべてに共通することなのかなと思うんですけども。</p> <p>まずは、再編振興検討委員会で、20 人以上という数字が出た、この数字は非常に尊重すべきことだとは思いますが。ただ、数字在りきではなくて、少し数字の概念を取っ払って、各地域で、その地域で子どもが育っていくことが大事だと思います。</p> <p>例えばですけども、各地域、それをどういう地域に分けるのかっていうのは、それはちょっと分かりませんが、進学拠点校、それから、そこまでいなくても中間層の学校、それから発達障害などによって個別対応が必要な、そういったことに対応できる学校、それから定時制、専門的な学校。幾つかに分けられるかと思うんですが。そういう学校が各地域に配置されているのかどうか。そういった目線を見た時に、配置されているなら配置されている。複数あるんだったら統合とか、そういったことも考えた方がいいかもしれません。</p> <p>少しそういう目線で考えて、その後、では人数がどれぐらい各校配置できるのか。そこに 20 人という基準でものを見て、人数が足りないようであれば、そこを 20 人になるようにどうすればいいのかとか。そういう順番で考えていった方がいいのではないかと。方向性としてはそういう考えにした方がいいのではないかなと思えます。</p>
<p>竹島委員</p>	<p>県立高等学校再編振興検討委員会の方々が考えた、本当に専門の方が考えた人数ですが、やはり、この高知県のことを考えた場合、中山間地域はもうギリギリのところまで来ていると思えます。これ以上人数というか基準を減らすと、やはりその質とかスポーツの団体競技ができないとかいった場合に、生徒たちが 3 年間、この高校で何かいい思い出っていうか、自</p>

<p>田村教育長</p>	<p>分たちが輝けることをしたなっていうのがすごくなくなってくると思います。</p> <p>だから、人数の定員を地域ごとに設定できるとか、そういうことが高知県の場合、特別なこととしてできないかなと思います。</p> <p>ありがとうございました。</p> <p>皆さん、共通して言われるのは、20名という最低基準というのは、これはやはり尊重すべきだろうということですね。ただ一方で、その20名という数字だけにとられるんじゃないかと、一つは20名を確保するための努力をするべきではないかということ。あるいは20名を切った時に、質の保障をITの活用、あるいは大規模校との連携とかいうようなことでの、工夫をするべきではないかというお話。</p> <p>それから、地域ブロックのなかで学校の配置を、進学校であるとか、一般的な高校、支援の必要な子どもを支援する学校、定時制の高校だとか、そういう学校の内容によってバランスの取れた配置を考えて、そのうえで、20名ということについては改めて考えるというようなことでどうかと。</p> <p>大体こういったようなお話であったかなと思いますけれども、そういうような取りまとめでよろしいでしょうか。</p> <p>この件について、特にないようでしたら、次の項目に進ませていただきたいと思います。似たような問題になりますけれども。</p> <p>次に、分校の最低規模について、まず説明をしてください。</p>
<p>高等学校課 高岸課長</p>	<p>続きまして、分校の最低規模について、資料は20ページ、21ページをお願いいたします。</p> <p>まず、20ページの最初からですけれども、分校の最低規模につきましては、1学年1学級20人以上であり、最低規模を下回った場合の募集停止の猶予期間は、「2年連続して最低規模に満たない状況になった場合」に検討することになっています。最低規模を2年連続して下回ったからといって、直ちにその学校を募集停止にするという考え方はとっておらず、検討するにとどめているのが現状でございます。</p> <p>分校の現状といたしましては、(2)に書いておりますけれども、追手前高校吾北分校が、平成29年度の入学生が最低規模を下回っております。中村高校西土佐分校は、2年連続最低規模を下回ったという現状がございます。その下の(3)につきましては、これまでの教育委員会協議会で出された分校についての意見を再掲しております。</p> <p>21ページをお願いいたします。</p> <p>分校の最低規模の考え方が出された経緯といたしましては、本校と同様に、県立高等学校再編振興検討委員会において、「地域で高等学校教育を受ける機会を保障しなければならないが、学習指導や学校行事、部活動などの充実を図り、生徒が互いに切磋琢磨することができ、高等学校教育の質が保証される集団としての最低規模は、1学年1学級20人以上が望ましい」とされたためでございます。</p> <p>また、猶予期間を「3年間で2度ある」から「2年連続」としたのは、「地域と連携した分校の活性化の取組がより継続できるように見直すべきである」という理由から、改定をしたものでございます。</p>

	<p>分校を存続した場合のメリット・デメリット等につきまして、表の方にまとめておりますけれども、基本的に本校の場合と同じようなメリット・デメリットでございます。19 ページの本校を存続した場合、統合した場合と同じようなメリット・デメリットがございます。</p> <p>ただ、一部違ったところを説明をさせていただきますと、一番右の端になりますけれども、分校から本校とのキャンパス制に移行した場合の「〇（丸）」の五つ目、一番下になりますけれども、大きなメリットといたしましては、合同の活動を実施すれば、部活動等は合同チームで全国大会まで出場が可能であるという、大きな部活動でのメリットがあるということです。</p> <p>また、デメリットとしましては、その下にありますけれども、移動距離（時間）がかかりますので、キャンパス制のメリットを生かした本校との合同の活動等が、どこまでできるのかという課題が生じてくるというようなこともございます。</p> <p>分校の最低規模について、どのように考えるかということで、本校の最低規模とも非常に関連するところではございますけれども、全体的な方向性について、ご意見をいただけたらというふうに思います。以上でございます。</p>
田村教育長	<p>この件は、先ほどの本校の最低規模ということと、ほとんど同じような議論になるのかなという気はしますけれども、2年続けて20人以下であれば、廃止統合を検討するという事になっているということですのでけれども、これについて地域では、存続についてご意見が強かったということかと思えます。</p>
竹島委員	<p>吾北分校を学校訪問をさせていただいた時に、やはり場所的にも大変だなと思うんですけども、諸事情で地域から出られない子どもたちのためには、私は必要だと思います。ここにも書かれているように、いろんな距離的なことがあるとは思いますが、いろんな行事は本校ととか、その地域の、なかなか中山間部の方は大変だとは思いますが、行事などは、やはり一緒になって盛り上げてやっていったらいいと思うので。今まででも、他の分校がどのようになくなっていったのかっていうことは、私なんかも分からないんですけども、やはりこの後期再編としては、学校訪問した限りでは何とか残してあげたいなとは思っています。</p>
田村教育長	<p>今、個別の学校についてのご意見という形で出ましたけれど、基本的に分校については、あまり20人という規模にこだわらずというような、そういうようなご意見かと思えます。そういうことでよろしいですかね。</p>
竹島委員	<p>はい。</p>
中橋委員	<p>最低規模のお話とは、ちょっと外れるとは思いますが、私の印象として、本校・分校も同じ高校の名前が付きながら、本校と分校って全然別の高校だなというのをすごく、何かそういうような認識を持っていて、間違っているかもしれませんが、そういう印象をすごく持ってしまう</p>

<p>田村教育長</p>	<p>した。</p> <p>やはり、せっかく本校・分校あるんだから、もっと連携をし、その形がどういう形になるのかはまた別として、本校との交流、そういったものを図っていくことが、すなわち活性化にもなり、最低規模の人数にも、また満たすような人数になるんじゃないかなというのを、少し感じています。</p> <p>ありがとうございました。20人がどうかというよりも、本校との連携をもっと強化することで、活性化とか、生徒の数確保にもつながるんじゃないかと、そういうご意見かと思えます。</p>
<p>木村委員</p>	<p>先ほどの第1の問題と同じで、やはり適正人数というのを動かす必要はないんじゃないかなというふうに、私個人的には思っています。ただ、その対応は別でございますけども、本来一つの学校として機能といいますか、人数的に無理があったから、多分、分校に何年か前になったっていう、そういう過程を経てるんじゃないかというふうに想像するんですけども。</p> <p>先ほど中橋委員さんがおっしゃられたように、このキャンパス制を導入するかどうかは別にしても、私も、本校と分校は全く違う学校だなという感触を受けました。元々、より近いものに、中身も含めて近いものにしていくことが、キャンパス制にするにしても必要なことになると思います。ここの課題にはあがっておりませんが、大学のイメージのキャンパス制だと、場合によっては、どっちの学校へ行ってもいいというようなことも、起きるかもしれませんので、少しその辺にも課題があるんじゃないかなというように気はしています。</p> <p>いずれにしても、分校の存続というのは、少なくともいくつか行った学校を見る限り、ここに学校がなくなるというのは、地域にとって本当に損失が大きいんだろうなっていうことは感じました。</p>
<p>八田委員</p>	<p>私も、中橋委員の言うことが、すごく引っかかっています。まず、最低規模が本校の最低規模と同じというのが、実はちょっと違和感があったんですね。確かに20人というのは、充実した教育をするのに必要な数字という理解ができるんですけど。</p> <p>分校は、本来は本校があるっていう強みがあるはずで、本校と一体に何か運用することで、規模が小さくても、何かうまくやっていけるっていう方法が、本来は分校だから、強みとしてあるんじゃないかなという気がするんですよ。それがうまくいってないというところに、今、分校の運営に問題があるような気がします。</p> <p>従来だったら難しかったかもしれないことが、ICTが発達したことで、いろんなやり方がこれから出てくるんじゃないかなと。ただ、授業の中継をやるとか、そういうことでは駄目で、例えば、再編振興に関する報告のなかで、子どもたちのアンケートの結果があるんですが、このなかで結構面白いというか、注目しているところで、中学生が高校に行った時に何を望むかというところの、第1位は進路につながる学力46%、第2位は友達と出会うことだと。友達との出会いを高校に期待している、これが39%ありますね。かなり大きな割合で、新しい出会いを期待している。</p> <p>じゃあ、分校が閉じて運用されてしまうと、それは希望がかなわないわ</p>



	<p>けですよね。ここの分校に行くと、本校と同じように一緒に友達ができるよと。友達ができるような ICT の活用って何なんだろうと。例えば普段から、教室がインターネットでつながっていて、お互いの顔を見ながら一緒に勉強をしている。あるいは課外活動なんかでも、非常に頻繁に一緒に活動しているとか、何かそういうことがあると、ひょっとすると分校の最低規模ってというのは、もう少し、少なくとも何とかできるのかなという気がしています。</p> <p>ただ、従来のやり方をするのであれば、本校の最低規模とどうしても一緒になってしまう。だから、どうやって分校であることの強みを発揮するのかと、そういうところを考える必要があるのかなと思います。</p> <p>本校の最低規模のところでも申しましたけど、分校の最低規模につきましても、議論のなかでの結果だと思っております。最低規模については、基本的に尊重していきたいという思いは持っておりますが、本校の場合と同じような観点も持っております。</p> <p>20 ページにも主な意見（一部抜粋）ということで、書いていただいておりますけど、吾北分校については 8 ページ、西土佐分校では 12 ページにつきまして、この資料以上に、いわゆる首長さんはじめ教育長さんが、この分校の存続のために、どういうことをしているかというご説明もいただきました。このことについては、私は、やはり市町村の動きを一定見守りながら、判断をするべきではないかというふうに思っております。</p> <p>吾北分校と高知追手前高校の関係でございますけど、私、ちょうど行った時に、高知追手前高校の授業と吾北分校の生徒の授業の、双方向的な授業を見させていただきましたが、そういうところで、だんだんご意見もありましたように、本校と分校の強いつながりもつくっていただければ、この上ないなという思いがしました。以上でございます。</p>
平田委員	<p>ありがとうございます。分校についても、20 名という基準は基準として尊重するという前提として、ただし、分校はそもそも小規模校ということが前提になっているということを考えると、本校との連携によってもっと、規模が小さい分校であってもやっていける方法はあるんじゃないかと。そういうことを検討するべきではないか、というようなご意見が出たんじゃないか思っております。</p> <p>あと、地元の市町村長さん、教育長さんの、存続に向けての努力も大変大きいものがあると。そういうことについて、見守ってから考える必要もあるだろうという、ご意見であったかなというふうに思いますけれども、大体そのような取りまとめでよろしいでしょうか。</p> <p>そしたら、続きまして、定時制について説明をお願いします。</p>
田村教育長	<p>ありがとうございます。分校についても、20 名という基準は基準として尊重するという前提として、ただし、分校はそもそも小規模校ということが前提になっているということを考えると、本校との連携によってもっと、規模が小さい分校であってもやっていける方法はあるんじゃないかと。そういうことを検討するべきではないか、というようなご意見が出たんじゃないか思っております。</p> <p>あと、地元の市町村長さん、教育長さんの、存続に向けての努力も大変大きいものがあると。そういうことについて、見守ってから考える必要もあるだろうという、ご意見であったかなというふうに思いますけれども、大体そのような取りまとめでよろしいでしょうか。</p> <p>そしたら、続きまして、定時制について説明をお願いします。</p>
高等学校課 高岸課長	<p>続きまして、3 つ目の定時制（夜間部）について、資料は 22 ページ、23 ページになります。</p> <p>22 ページの上からまいります。定時制（夜間部）の最低規模につきましては、「1 学年 1 学級 10 人程度以上」から「学校全体の生徒数を 20 人以上」に緩和して、学校の維持に努めることとしています。現在、最低規模を下回っている学校につきましては、(2) に書いておりますけれども、室戸高</p>

校と中芸高校が3年連続して最低規模を下回り、須崎高校につきましては平成29年度、清水高校については2年間、最低規模を下回ったという状況がございます。その下の(3)につきましては、今までと同様に、教育委員会協議会で出された意見をまとめております。

23ページをお願いいたします。

定時制(夜間部)の最低規模の考え方が出されました経緯といたしましては、県立高等学校再編振興検討委員会において、「働きながら学ぶ勤労青少年に教育の機会を保障する場であるとともに、不登校や中途退学を経験した生徒、発達障害等のある生徒などの学びの場や生涯学習の機会を提供する役割が大きくなっている。そのため、生徒一人一人に対応した支援体制ができる学校規模として基準を緩和すべき」ということで、現状の基準に緩和したところでございます。

その下に、現在の定時制をどのような形で存続した場合、あるいは募集停止した場合のメリット・デメリットについて、表にまとめております。

存続した場合のメリットといたしましては、地域に様々な学びを保障する場(定時制夜間部)がある。また、聴講生という制度がございますけれども、聴講生というのは、入学して全部を履修するのではなくて、科目の一部だけを履修する聴講生という制度があるんですけれども、聴講生にとっては、地域での生涯学習の場が残るといったようなメリットがございます。

ただ、デメリットとして考えられる課題としては、少人数でも実施できる教育活動の在り方を、これまで以上に検討し、実施していく必要があるというようなことがあります。また、最低規模を変更して存続を考えた場合のデメリット、課題としましては、○の3つ目になりますけれども、これ以上基準を緩和し、在籍生徒数がさらに減少すると、様々な教育活動を展開することが難しくなってくる、というような課題も加わることとなります。

右の端には、募集を停止した場合のメリット・デメリットということで掲載をしておりますけれども、募集停止をした場合のデメリットといたしましては、地域から様々な学びを保障する場(定時制夜間部)がなくなると。また、聴講生にとっては、地域での生涯学習の場が一つ失われる。また、募集停止により、遠方にしか学ぶ場がないという生徒に対して、どのようにその場を保障するかを、通学手段も含め検討する必要があるということ。最後になりますけれども、夜間の長時間の通学は、交通事故等が懸念されるといった、多くの難しい課題が発生することとなります。

このようなメリット・デメリットがあるなかで、定時制(夜間部)の最低規模についてどのように考えるか、全体的な方向性についてご意見をいただけたらと思います。以上でございます。

田村教育長

定時制の場合は、学校全体で20名というのが、一つの基準になっているわけですが、今これを下回っている学校は結構多い、4校あるということですが、この件について、今度は平田委員から順番にお願いします。

平田委員

私の考え方ですけど、本校・分校、定時制についての最低規模につきましては、基準については尊重したいという想いを持っておりますが、今

	<p>目的な姿も勘案しながら、定時制教育は考えていきたいというふうに思っております。</p> <p>定時制教育といえば、過去においては、勤労青少年のための学びの場というふうな表現をよく使っておりましたけど、現在は、不登校とか中途退学を経験した子どもなど、いわゆる弱い立場の子どもたちに多様な学習ニーズを与える場であると、いうふうにも思っております。社会全体も、そうした弱い立場の子どもたちに配慮した教育の学びの場というのは必要だと思います。</p> <p>最低規模を下回っている学校も、ここへ載せていただいておりますけど、29年度ぐらいを見た時には、人数的には何とか可能にしようと、学校として努力している姿が、私には見えております。</p> <p>いろんな市町村を回りまして、定時制の教育につきましても、すべての市長さん、教育長さんから、定時制教育っていうのは地域にとって必要だというお話もお聴きいたしました。東部の定時制高校だったと思いますけれど、生徒数より聴講生の数が多いという現実、いわゆるリカレント教育と申しましょうか、そういう役割も地域で果たしている定時制高校もあるということでした。</p> <p>私としては、定時制教育については、弱い立場の生徒たちの学びの場として、できるだけ残していくべきではないかというふうに考えております。以上です。</p>
八田委員	<p>私も、定時制というのは、これまでの本校・分校での最低規模というのとは、少し意味が違うのかなと。定時制の場合は、やはり教育のセーフティネットっていうか、もう本当に、非常に厳しい状況にある人たちが学ぶ、その機会を提供する場であるということから考えると、あまり厳密な、最低規模というような言い方で考えるべきものではないのではないかなと。</p> <p>ただ一方でももちろん、県の予算を使って運営していくうえで、どこまでそれを提供し得るのかという問題はあるかもしれませんが、それは、現在の最低規模が在籍者20人っていう数字の根拠に、必ずしもなっているものではないのかなという気がしています。</p> <p>むしろ遠隔地から夜間に通学するという危険性を考えると、地域に適切に配置をすることがむしろ大事で、あまり最低規模にこだわってするものではないのかなと。一方で、その運営のコストが非常に厳しくなってきた時には、こちらでもやはりICTとかを使って、どうやって、低コストって言ったらいけませんけど、持続可能なやり方で定時制を運営していくか、そういうことを考えるべきではないかと思えます。</p>
木村委員	<p>全く、八田委員さんと同意見で、少なくとも働きながら勉強したいという人や、学び直しをしたいという人の勉強の場を取り上げることっていうのは、非常に問題があるんじゃないかと。</p> <p>ただ、望ましい姿として、学校全体の数が20人以上ということ、10人にしたりする必要はなくて、やっぱり望ましい運営ということでは、最低でも全体で20人以上の方が望ましいという。ただし、20人でないといけないうって必要はない、というふうに考えました。</p>

中橋委員	<p>今までの意見と一緒にになりますけれども、資料 23 ページの（４）の所で表があって、気になったのが、募集停止とするという場合のメリットとして、最低規模を遵守した定時制（夜間部）の配置となるのですが、だからどんなメリットがあるのって言われた時に、多分、いろんな各地のご意見を聴かせていただいて、その先のメリットっていうのを感じられないなっていうのが、私の正直な感想です。</p> <p>やはり、学びの機会の保障ということを考えて場合に、この定時制については、最低規模は望ましい姿として維持することは大事だと思うんですが、あまり本校・分校以上にこだわり過ぎることはないんじゃないかなと思います。</p>
竹島委員	<p>高知県の子どもたちを見た場合、不登校や中途退学の人数の割合が増えてきているというか、本当はいけないことなんですけれども、やはり多様なニーズを考えた場合、募集停止ってことにはならないと思うし、今のこの人数を見ても、そんなに上下してはいるわけではないので、このままの最低規模の人数でやっていった方が、多様な方々には対応できるかなと思います。</p>
田村教育長	<p>ありがとうございました。</p> <p>基本的には、先ほどの本校とか分校とかと、規模についての考え方自体が違うんじゃないかと。規模の重要性ということよりも、弱い立場にある生徒にとってのセーフティネットという側面を、もっと重視するべきではないかと。20 名という数字については、望ましいという意味合いぐらいの数字にはなるが、あまりそれにこだわる必要はなくて、やはり地域地域に必要な定時制の高校を残すということ、むしろ優先するべきではないかと。</p> <p>あと、維持する手法としては、ICT の活用だとかいうような、色々工夫する余地もあるのではないかと。それから、今 20 名を下回っている学校が多いとはいえ、そんなに急激に減っているわけではないし、20 名に近い数字でもあるということから考えると、あえて廃止とかいうようなことを検討する必要はないんじゃないか、というようなご意見であったか思いましたが、大体そういったようなことでよろしいでしょうか。</p>
各委員	<p>（了承）</p>
田村教育長	<p>ありがとうございました。それでは、最後になりますけれども、各校の振興策について説明してください。</p>
高等学校課 高岸課長	<p>資料 24 ページ、25 ページになります。各校の振興策について、まず（１）の「県立高等学校再編振興計画」の中で書かれている内容を、簡単にまとめたいと思います。</p> <p>県立高等学校には、本県で学び、育つ生徒たちが、将来、社会人・職業人として自立し、自らの人生を切り拓いていくことができるよう、適正に応じた進路実現を支援していくことが求められています。官民挙げた産業振興や地域づくりの取組が進められているなかで、県立高等学校の役割り</p>

も、より重要なものとなってきています。また、近い将来発生が見込まれる南海トラフ地震から生徒の命を守り、安心して学べる教育環境を整備することも、喫緊の課題となっているということがございます。

県立高等学校として、それぞれの学校の現状や課題を直視し、社会環境の変化等も見据えながら、次の5つの視点を基本に、再編振興の取組を推進するというところで、ここでは、非常に関連の深い2つの視点を掲載をしております。

一つ目は、キャリア教育の充実ということで、キャリア教育の3本柱である「学力向上」「基本的生活習慣の確立」「社会性の育成」に向けた取組を充実、強化すること。また、2つ目の大きな視点としましては、生徒や保護者の期待に応える教育活動の推進ということで、後半になりますけれども、社会のグローバル化等に対応できる人材や、理数系の人材の育成などに取り組むとともに、不登校や中途退学を経験した生徒や、発達障害のある生徒等への教育の充実に向けた、指導方法の改善や支援体制の充実などにより、学びのセーフティネットの構築を図ること。また、「高知県産業振興計画」や「日本一の健康長寿県構想」など、本県の重要政策の取組も踏まえながら、地域の中での役割を明確にし、地域社会や産業界と連携した取組を推進するというような視点が示されております。

こういった視点が示されたなかで、「前期実施計画」におきましては、すべての学校について「学校の在り方」を、それぞれの学校について記載をしております。「後期実施計画」におきましても、学校再編だけではなく、学校の振興、魅力ある学校づくりを充実していくものにしていきたいと、いうふうに考えているところでございます。

25 ページの方には、これまでの教育委員会協議会で出された意見を抜粋して、再掲をしているところです。各校の振興策について、どのように考え、どのように進め、全体的な方向性について、ご意見を最後にいただければというふうに思います。以上でございます。

田村教育長

各校の振興策について、これについては、各地域でご意見を伺った際にもいろんなご意見をいただいております。

生徒の確保という意味合いも含めて、あるいは高等学校が地域の核的な施設であるというような観点から、振興策について、これは個別の学校というよりは、こういうような方向で各学校の振興策を考えていったらどうか、というご意見をいただければと思います。

それでは、今度は竹島委員からお願いできますか。

竹島委員

町長さんや市長さん、教育長さんからいろんな意見をもらったなかで、高知県が大綱として挙げているなかで、郷土愛とか、そういうのをこの柱にしていたと思うんですけども、結構そこら辺に注目された市長さんとか町長さん、教育長さんは、あまりいなかったように思われるんです。私も、今、ざっと目を通したところ、安芸市の教育長さんとか四万十町の副町長さんがそういったことに、ちょっと触れられているってことで。

これから、振興策ということで、やはり地域の強みとか、これを読んでいくなかで、文武両道じゃないけど、結構スポーツなんか力を入れてる市町村もありますし、そこら辺をもっと私たちが見守りながら、どうい

	<p>ことを中心にやっていくかってことを、これからいろんなことを考えてやっていったら。私たちも勉強しながらやっていきたいと思います。</p>
田村教育長	<p>ありがとうございました。振興については、全体のことで個別のことで構いません。</p>
中橋委員	<p>振興について、最初に本校の最低規模についてのなかで話してしまったところもあるんですけども、ちょっとブロックごとというのか、地域ごとにどんな学校があったらいいのかっていうなかで、やはり保護者の意見が多かった、進学拠点という視点。それから、特別対応が必要な学校、定時制などの学校、専門的な学校、そういった数種類の特徴を持った学校が、各ブロックに配置されているのかどうか。そういうところから見て、現状の学校が力を入れていることなんかも照らし合わせながら、さらにその現状の学校、特徴がある学校に、更にその特徴を推進するように振興を考えると、何かそういう視点から、振興策というものを考えていったらいいのではないかなと思います。</p>
木村委員	<p>私は、振興策については、各学校の校長先生、それなりに凹凸（おうとつ）はありますけれども、非常によく考えてやっていこうとされてるというのを感じました。市町村も同様で、多少の温度差はありますが、地域にとっての学校の在り方というのを、真摯に考えて取り組んでおられるなというふうなことを感じました。</p> <p>そのなかで一番感じたのは、いくつかの高校で総合学科、後でその問題は出てくるんでしょうけども、いい大学へ入りたいというニーズがあまりにも高すぎて、本来、私は一つのすばらしい在り方だというふうに、総合学科というのは考えてるんですけども、その良さが正しく、父兄や子どもたちに伝わってないんじゃないかなと。</p> <p>実は、学校を出て地域、もしくは県外でもいいんですが、社会人になった時に、それぞれの子どもたちにとって、何をを見つけ出すことが本当は一番大事なのかということを考えると、みんながみんな国立有名大学へ行くわけではないので、もっともっと違う、子どもたちの将来の考え方が必ずあるはずなのに、親も子どもたちも、何か正しくその辺が伝えきれてないんじゃないかなというのを感じて。</p> <p>それこそが、いろんな学校の振興策につながるんじゃないかなという気がしているんですが、それがそうとは感じておられないというのに、少し疑問を感じました。</p>
八田委員	<p>各学校で色々振興策を考えておられる。考えているというか、実際いろんな努力をされている。ちょっと話がずれますが、今回もある、この参考資料3が、私はずっと気になっていて。全日制が定員 5,000 人に対して、ここ3年間ずっと 4,000 人の入学者ということなので、全日制だけでいうと、全県で毎年 1,000 人の定員割れをしてるんですよ。1,000 人っていうと、40 人クラス 25 個ですから、全体としては、ものすごい定員は足りていないんだけど、それを全体でうまく分配しているというか、全体に定員不足を分け合ってるという状況です。そういう状況が、これからもうあと 1,000</p>

人減るわけですから、ますます厳しい状況に入ってくると。そうするといわゆる全入というか、一通りの努力をすれば、高校に入るのは何とか入れるという状況が今、ほとんどそうなっていると。

そうなった時に高校受験が、変に受験競争が強くなればいいということではないんですけども、あまりその競争がないなかで、受験を安易にというか、考えてしまって、本当の進路を十分に考えずに高校に進んでしまう。そうすると、何となく普通でいいという感じで、総合であるとか、産業系、あるいは商業みたいな、特色のある勉強よりは、何か普通のついでなところ、どうしても集中しがちになるのかなという気がします。

そうすると、高等学校としてキャリア教育の充実というのは、振興の柱になるとは思うんですけども、一方で中学校の役割がものすごく重要なと。中学校の段階で、進路をしっかりと考えられるようなキャリア教育をしていかないと、今の定員が大幅に余ってしまっているという状況では、適切な進路選択がうまくいかないのではないかなというところが、一つ危惧するところです。

ですので、高校側が特色を明確に出すことと、それに対して、中学生を指導していただいている中学校の先生方が、そういうものをよく理解して、子どもの将来にあった進路を適切に指導できると、そういうところが非常に重要になるかなという気はします。

それから、高校ごとに、その地域とのつながりを非常に密接にしている高校が、ほとんど多かったというふうに関心したんですけども、その時にどうしてもローカルになり過ぎてる感じもするんですね。高校のある市町村はもう、集中的に密接にやっていただけなんですけども、高等学校っていうのは、もう少し広域に幅広く生徒が集まるっていうことを考えると、もう少し広域で学校とその地域の行政の方、あるいは中学校の先生方がつながるような、そういう仕組みがないとお互いを理解ができないのかと。

じゃあ、その地域でどんなビジョンを持って、今、中山間とか非常に、人口減少とか厳しい問題があるわけなんですけども、それをなんとか乗り越えてやっていこうっていう、どんなビジョンを持ってやっているのか。そういうことを少し広域にわたって学校側は把握したうえで、じゃあそのなかで、うちの学校はどんな特色のある学校にしていくのかっていうことを、もう少し広く考えた方がいいのかなという感じがします。

今は全県一区ですので、極端な話をすると全県なんですけど、そこまではいかないにしても、それぞれの地域の将来を担っている学校として、どういう在り方をするのかっていうことを明確にして、それを明確にアピールして、それで中学校からの進学指導に、分かりやすい発信をする必要があるのかなという感じがします。

平田委員

各校の振興策につきまして、私自身が各校ということでは、ようお話をいたしませんけれども、5ブロックを廻って、高等学校として、一部の学校でございますけど、考えてほしいなと思ったことがありました。これは地域連携が弱いとか、希薄である高校があるということもお聞きしました。また高校が、中学校や地域への情報発信も弱いと。またその学校での教育内容を十分に伝えていない、アピール不足だとか、そのなかで魅力を

<p>田村教育長</p>	<p>感じないとかいう声もお聞きしました。</p> <p>また訪問していくなかで、卒業生とか現在の保護者からは、地元の学校への期待感は大変あるなと感じましたけど、高校選択にあたって、現在の中学生や保護者から見て、その高等学校の、やはりどれくらいの教育水準かということが、進路選択にあたっての大きな高校評価になっているなというふうに考えました。</p> <p>やはり、この学力問題というのは、小中高が連携をして取り組んでいくという必要性を感じました。今後の高等学校の振興策、私自身、大ざっぱに申しまして、せっかく現在、県の教育大綱と教育推進計画に取り組んでいるわけですので、その趣旨にのっとって、各校は我が校の強み弱みを、現状把握に努めていただいて、PDCA サイクルを回して、生徒、保護者から期待される高等学校を目指していくというのは、大ざっぱの大局観ですけど、そこが各校に目指してほしい振興策だと、私は思っております。以上です。</p> <p>ありがとうございました。</p> <p>一つは、それぞれの学校の特徴を、さらに生かす方向で考えるべきではないかというところで、特に、地域ブロックのなかで各学校について、位置付けというか、特徴があるんだろうと。進学拠点校であったり、あるいは学び直しといった個別に支援する学校であったり、あるいは産業系の専門学校であったり、あるいは定時制の学校であったりというような、それぞれの学校の特徴をさらに磨くような方向で考えてはどうかというようなお話でした。</p> <p>それから、あまりにも学校において、大学進学ばかりを希望する傾向があるけれども、それだけではない。もっとその総合学科の特徴を生かすなど、別の形の学校の魅力化というような方向性もあるのではないかなというご意見がありました。</p> <p>それから、現在でも定員割れの状況で、さらにこれから生徒数が減っていくなかで、高校に非常に入りやすい状況が出てきたなかで、中学生に将来を見据えた進路選択をしてもらう必要があるだろうということです。そのためにも、高校において、広域的な観点からどうあるべきかと。広域的なつながりをもっと重視しながら、その広域的な地域のなかで、高校はいかに在るべきだというようなことを踏まえて、そのなかでの高校の役割を明示して、それをしっかりと適切に、中学生に選んでもらうというような方向性が必要ではないかなというご意見でした。</p> <p>それから、地域の連携が弱いのではないかと、あるいは地域へのPRが十分にできていないような高校も見られるということから、例えば、小中高の連携とか地域との連携をもっと強化していく。特に、高知県の教育大綱、あるいは第2期教育振興基本計画の趣旨を生かして、その学校の強み弱みを明確にし、PDCAを回すなかで、振興策を回していくべきではないか、というようなご意見であったかなと思いました。</p> <p>十分なまとめになってないですけども、大体、今言ったようなことでよろしいでしょうか。</p>
<p>各委員</p>	<p>(了承)</p>



田村教育長	<p>それでは、そのような高校のご意見があったということで、まとめさせていただきます。</p> <p>本日の協議事項は以上でございますけれども、特にこれに関連して、委員の皆様からご意見ご質問等ございましたら、お願いいたします。</p>
-------	---

**【閉会】**

田村教育長	<p>それでは、事務局から何か連絡事項ございますか。</p>
<p>高等学校課 高岸課長</p>	<p>次回のご案内をさせていただきます。</p> <p>次回、第8回目になりますけれども、来週の金曜日、2月23日金曜日、18時から正庁ホールを予定しております。</p> <p>本日の16ページの資料の3にあります、残りの3つの項目について、「南海トラフ地震への対応について」「併設型中高一貫教育校について」「学科（総合学科や地域の実態やニーズを踏まえた新たな学科など）について」、この3つについて、全体の方向性についてご議論をいただきたいと思っております。以上、次回のご案内でございます。</p>
田村教育長	<p>次回は10日後の2月23日ということでございますので、よろしく願います。</p> <p>特にないようでしたら、以上で本日の教育委員会協議会を終了させていただきます。大変、ありがとうございました。お疲れさまでございました。</p>